

刀と武器と美しさ

徳 澄 要

格式高い家を訪問すると、案内された和室に日本刀が鞘に収められた状態で飾られていた。家のご主人にその刀について尋ねると、この刀は我が家に伝わる名刀で先祖の誰々という侍が帯刀していて云々……という話を聞くことがある。

かつて文化人類学者のルース・ベネディクトは、日本人の精神を「菊と刀」という言葉で表現したが、日本人の日本刀に対する愛着は今も昔も変わらず強い。実物を飾るような古風な家は、少なくなったが、若者の間では日本刀をテーマにした漫画作品が社会現象とも言えるべきブームを巻き起こしたことがある。日本刀をテーマにしたサブカルチャー作品を通して日本刀に心奪われる者は多い。やはり日本刀は時代を超えて老若男女に愛されるものだということがわかる。広く日本人に愛されたという点で日本刀に比肩する武器は無いと言って良い。

日本史を顧みても、古代日本でも青銅剣が祭祀の道具として用いられ、武士の台頭する時代には、帯刀は武士の誇り高き特権とされ、明治維新を経て廢刀令が施行されてもなお、旧日本軍の将官は名誉ある装備品とし



て軍刀を帯刀していた。

何故日本刀はいつの時代もここまで日本人の心を掴んで離さないのだろう。その理由はまさしく、日本刀の「強さ」ではなく「美しさ」にある。

実は日本刀は（特に真剣は）実戦において純粹に武器として用いられる機会は少なかったとされる。弥生時代に高地性集落が形成されたその時から、日本での白兵戦でもっぱら槍か弓、中世以降は銃が主たる武器として活躍し、一方の日本刀はというと、実際に人を斬る目的で使われるのは暗殺か処刑の時であり、全体的にはどちらかと言えば、武士の儀礼杖としての性格が強かった。その歴史の中で実用性は度外視されたのである。一方で、日本刀の武器としての実用性を見よう。確かに日本刀の切れ味は世界に類を見ないほど素晴らしい。反面、耐久力が低い為日本刀で切れる人数はせいぜい三人までである。それ以上は手入れや打ち直しをしなければ曲がったり刃こぼれしたりしてしまう。連続使用には耐えかねるといのが、専門家の見解だ。

つまり、残念ながら、日本刀は歴史上、戦場という場面において使うにはあまりに脆弱な武器だったのである。戦場でなくとも、かの有名な桜田門外の変ですら、井伊直弼の命を奪ったのは日本刀による刺突ではなく、ピストルによる銃撃であったという学説が有力だという。

つまり、今日に至るまで、『敵をバッサバッサと薙ぎ倒す』というような日本刀神話が続いているのは、まさに日本史日本刀が実戦で殆ど抜かれる事無く鞘に収められ続けた結果、実用的進化ではなく美術的進化を遂げてきたことに由来すると言わざるを得ない。

ここまで日本刀について説明したが、武器が美術品でもあるという話は、何も日本刀に限った話ではない。また、日本に限った話でもない。西洋では今なお儀式でのサーベルの帯刀が軍人の誇りであるが、実際に戦地に赴くとなると、もはや彼らが握るのはマシンガンか手榴弾である。

古今東西、武器や兵器は往々にして、人の命を奪う道具として軍事的な目的で使用される側面と、何かの象徴もしくは美術品として嗜好される側面があるのだ。

武器を美術品と見る価値観は近現代に至るまで生きている。今日、近現代の銃や戦車、軍艦、戦闘機、現役の自衛隊の護衛艦に至るまで、兵器をこよなく愛する所謂「兵器マニア」が数多く存在する。無論、兵器マニアが兵器を愛するのは、彼らが好戦的・反平和的思想の持ち主だからではない。単に、彼らにとって兵器が美術品だからだ。

しかし、刀や銃ならともかく、戦車や戦艦はその規模もしくは費用ゆえに、彼らは自分の好きなものの実物を手近な場所に収集して飾る、という嗜好の形を取ることが出来ない。実物が見たければ公開演習を見に行くか、博物館に行くかしかない。

そこで、静岡の一大産業であるプラモデル業界が活躍する。収集不可能な兵器の極めて精巧なミニチュアが数千円で購入でき、組み立て、陳列し、自宅の棚でその美しさを楽しむ事が可能になるのだ。事実、兵器マニアの多くはプラモデルマニアでもあり、静岡で毎年行われるプラモデルのイベントや、駅前ホビースクエアでは、所謂『プラモデル』によって繊細な改造と塗装を施された兵器のプラモデルが多く展示される。

武器や兵器が有事の際に人の命を奪うために生み出されたこと、そしてそれらが用途の通りに「使われる」場面は筆舌に尽くし難い程に悲惨であることには無論疑いようがない。しかし武器や兵器は、平時には私たちの前にロマンを映し出す美術品として姿を現し、もう一つの存在意義を我々に示しているのである。